

## ごあいさつ

このたび、敬愛するシャーロット・バージス・デフォレスト先生の召天50年を覚える時に、先生の歩みと私どもに遺された財産、そして示された課題をご一緒に考える展示会をもてますことを、たいへん意義深く思います。それが岡田山移転90周年、さらに創立者であるタルカット先生、ダッドレー先生来日150周年の年と重なっていることも、偶然ではないと感じられます。長きにわたり神戸女学院の理事を務め、私どもをご指導くださった故竹中正夫氏はデフォレスト先生を「中興の祖」と評されました。確かにデフォレスト先生のお働きがなければ、本学院の教育の柱であるキリスト教、国際理解の精神、リベラルアーツは、神戸女学院の中で異なるかたちをとっていたことでしょう。しかし先生は、それらが無批判に同じかたちで続くことも望んでおられないのではないかと、とも思います。折しも創立150周年を前に、この企図が新たな神戸女学院像を語り合う契機となりますようにと願うものです。

2023年5月

学校法人神戸女学院 理事長・院長 飯 謙

## はじめに

これは一人の女性の物語。

宣教師として、また教師として歩んだ94年の生涯。

宣教師二世として日本で生まれ、両親から与えられたクリスチャンとしての信仰と、日本人と日本文化への深い理解と愛とが、自らの人生を神と日本人に捧げる決意をさせた。

シャーロット・バージス・デフォレスト先生は1879年2月23日、大阪・川口居留地で日本派遣宣教師の次女として生を受けた。幼少期を仙台で過ごし、アメリカで高等教育を受け、在学中に神のために働く決意を固めた。宣教師として日本に派遣された先生は1905年から神戸女学院で教師としての道を歩む。1915年からは第5代院長としてさまざまな改革を行ない、女性のための高等教育機関の確立を目指して奮闘する。現在につながる学長・中高部長制度の制定、時代に応じたカリキュラムの改訂、そして学校創立の地・神戸から西宮の岡田山へのキャンパス移転等々。

日米双方からの理解と支援を得て実現した神戸女学院での教育にその生涯を捧げた。

「同窓会の方々が時に学院に来られた際に寸刻を割いてもケンウッドの先生を御訪ねされる方が多い。又同窓会の大会等で議事の終わった後、狭い廊下に、広い校庭に旧きクラスメートの方々が先生を取り合い又譲り合って先生を囲み何かしら懐しそうに話あって居られる美しき光景が何時迄も何時迄も続く、これこそ私の言う女学院らしさであり、学院情景の潤いであり、其所に学院の校風は湧き出ずるのであります。決して教室で講義をし、講堂で説教しただけでは斯くも親しまれるものではありません。人徳の然らしむる処誠に我学院の至宝であります。」

小菅金造「二十餘年の御交際を顧みて」神戸女学院女子青年会編  
『デフォレスト先生記念特輯号』(YWCA季刊)1951年、p.12

1950年、多くの学生・教職員から慕われた先生は引退を決意し、惜しまれつつ帰米した。そして1973年7月2日、先生は引退宣教師たちの暮らす町ピルグリム・プレイスでその94年の生涯を閉じた。遺言により、遺灰は日本に送られ仙台にあるデフォレスト家の墓に葬られている。

## [2F 閲覧室]

1 『C.B. デフォレストの生涯 美と愛の探求』 / 竹中正夫著. 創元社, 2003 神戸女学院所蔵  
著者紹介 竹中正夫:1925年9月6日-2006年8月17日 京都大学経済学部、同志社大学神学部卒業、イエール大学大学院修了 (Ph. D)。同志社大学名誉教授、アジアキリスト教美術協会名誉会長。

本書は神戸女学院理事であった竹中先生が2000年10月20日創立125周年を記念して講演した特別講演「美と愛の探求—C.B. デフォレストの苦悩と望み」をベースに、国内外の資料収集・聞き取り調査等のフィールドワークを重ね、史料の裏付けを基に書かれたC.B. デフォレスト研究の書である。以下、竹中著書と称する。

## 《愛—人生—》

### 【誕生から学生時代】

2 シャーロット誕生を知らせる手紙 ABCFM 書簡 1879年2月25日付 マイクロフィルム複写  
パネル 神戸女学院所蔵

アメリカンボード(ABCFM)日本派遣宣教師 John Hyde DeForest が、次女 Charlotte の誕生を ABCFM に知らせた手紙。シャーロットは、1879年2月23日、大阪・川口居留地で誕生し、同志社の創立者・新島襄から幼児洗礼を受けた。

3 手紙の内容 (邦訳)『学院史料』第7号 / 神戸女学院史料室. 1989年3月31日発行 p. 38  
パネル 神戸女学院所蔵

「伝道団の爾後の財政上の困難につき長い追伸を書くにあたり、2月23日シャーロット・バージス誕生のこと、御通知申し上げます。[クラーク]博士には一、本当にお気の毒ですが、これが、私の為し得る最高のおわびであります」(『学院史料』第7号 p. 38)

4 川口居留地鳥瞰図 長岡續作画 パネル 桃山学院史料室所蔵

大阪にあった外国人居留地・川口居留地。この狭い居留地からいくつかの聖公会系キリスト教学校が誕生した。デフォレスト家の住居は居留地の端(26番地)にあった。

5 川口居留地のデフォレスト邸にあった牛の彫刻の写真 パネル 同志社社史資料センター所蔵

大阪の家の庭に飾ってあった石造りの牛の彫刻。同志社に寄贈され、現在は同志社大学今出川キャンパスのクラーク記念館前にある。

6 デフォレスト家の家族写真 数点 パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵

家族写真(前列左から母、妹 Louise、父、弟 John、後列左から姉 Sarah、シャーロット)。のちにサラは ABCFM の中国派遣宣教師夫人となり、ルイーズも準宣教師として日本で活動した。

7 東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）の写真 パネル 東北学院史資料センター所蔵

7歳から15歳まで暮らしていた仙台の住居。現在は東北学院が所有しており、2016年、国の重要文化財に指定された。

8 父デフォレスト博士の著書 数点 神戸女学院所蔵

*"Ema" : the votive pictures of Japan, Sunrise in the sunrise kingdom* (The forward mission study courses 5)、  
『内地雑居論』 他



デフォレスト博士は日本の良き理解者として日本についての講演や出版を行なった。「デフォレストはいわゆる日本ベッタリの国粹的日本論者ではなかった。日本の中にある矛盾や、朝鮮に対する政策などについて、彼は批判をおろそかにしていなかった。しかし、彼にとって重要なことは、日米における基本的な文化理解であるとし、アメリカの諸大学が日本語を身につけ、日本文化や日本社会を専門的に研究する米国の学者を養成するように要望している」（竹中著書 p. 28-29）

9 *The evolution of a missionary : a biography of John Hyde DeForest for thirty-seven years missionary of the American Board, in Japan* / Charlotte B. DeForest. Fleming H. Revell Company, 1914 神戸女学院所蔵

ミッションの依頼によって ABCFM 宣教師の父デフォレスト博士の伝記を執筆、アメリカで出版された。竹中著書は先生が父の伝記を次のような言葉で結んでいることを紹介する (p. 30)。「彼はたしかにその働きを継続してゆくことを望んでいたに違いない。しかし、彼が隣人愛の働きを今もなお神の広い世界でなし続けていないと誰が言えようか、さらに、彼が天国から新しい賜物をもって、この世で働く神の働き人たちの手を支えていないと誰が言えようか」（原著 p. 293）

10 スミス・カレッジ卒業後まもなくの写真 パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵

帰米後、アメリカで Newton High School に入学、1901年 Smith College を優秀な成績で卒業し、1903年 ABCFM から宣教師の任命を受け、日本に派遣された。写真はその頃のものの。

【本学着任後】

11 本学着任以降の写真 数点 パネル 神戸女学院めぐみ会・神戸女学院所蔵

1905年神戸女学院に着任した先生は第4代院長 Susan Annette Searle から嘱望され、1915年、第5代院長に就任した。

12 船で行き来していたときに使われていた旅行鞆 神戸女学院所蔵

先生が使用していた旅行鞆。どれだけの旅をしてきたのだろう。ある時は太平洋の荒波を越えて、またある時は時代の荒波を越えて。この鞆は楽しい旅の時も、苦難な旅の時も、常に先生の傍らにあった。



## 【晩年】

- 13 **晩年の3姉妹の写真** パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵  
晩年の三姉妹の写真（中央が先生）。
- 14 **ピルグリム・プレイスにて** 竹中著書(p. 232)より 春名康範画 神戸女学院所蔵  
1951年12月から過ごしたピルグリム・プレイスでのルームメイトとの生活を綴ったユーモアが溢れる文章を、元中高部長・春名先生が漫画にしたもの。
- 15 **仙台のデフォレスト家の墓の写真** パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵  
デフォレスト家の墓は仙台・北山輪王寺のキリスト教墓地にあり、先生の遺灰もここに葬られている。墓地の区画に対して斜めに据えられた墓石は、日米の懸け橋になりたいというデフォレスト博士の願いによる。
- 16 **追悼礼拝の写真** パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵  
先生は1973年7月2日アメリカで天に召された。遺灰が送られてきた仙台北教会で8月11日神戸女学院関係者も出席して告別式が行なわれた。9月18日には神戸女学院で追悼記念式が執り行なわれた。
- 17 **召天記念礼拝の写真** パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵  
めぐみ会仙台支部の同窓生が代々デフォレスト家の墓を守ってきた。節目となる年には神戸女学院関係者も出席して墓前で記念礼拝が行なわれてきた。2023年は召天50周年となる。
- 18 **スミス・カレッジの帽子とフード** 神戸女学院めぐみ会所蔵  
スミス・カレッジ卒業時に身に付けていたもの。帽子についているタッセルの色は学位によって違う。またガウンの上に羽織るフードの色も学部や学位によって異なり、学位によって形も異なる。
- 19 **西洋人形とデフォレスト先生手縫いの衣装** 神戸女学院めぐみ会所蔵 ※現物は2023年5月23日～6月9日のみ展示。6月12日以降は写真パネルを展示。  
幼少期、自宅で裁縫の手ほどきを受ける時に使用したお人形。赤ちゃんから結婚するまでの期間の衣装を手作りしたという。2018年修復済み。
- 20 **羽子板** 神戸女学院めぐみ会所蔵  
先生が所有していた蒔絵の台座付羽子板。
- 21 **タペストリー** 神戸女学院所蔵  
創立75周年を祝って先生が院長室北壁に掛けた西陣織「扇面」のタペストリー。

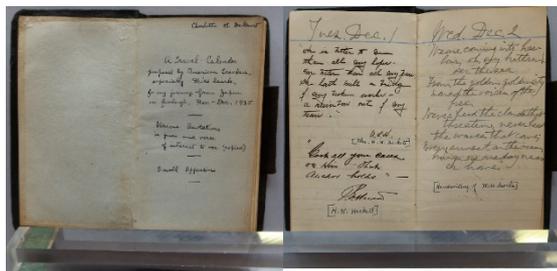


\*写真 神戸女学院めぐみ会所蔵

- 22 『讚美歌』 / 讚美歌委員会編. 讚美歌委員会, 1931 神戸女学院所蔵  
先生寄贈の讚美歌。本学図書館の受入は1949年2月。

23 Travel Calendar 1925 神戸女学院所蔵

前半は、1925年11月15日から12月2日までの賜暇による帰米の際の船中で、先生方が毎日一人ずつ書いた旅の記録。ソール先生、グレース・ストウ先生、メアリー・ストウ先生、ハケット財務主任等の記載が残る。記載者名は先生が後日記入。後半は、先生の覚書で、読書記録及び書誌情報、自作の詩の記録、出版社の住所等が記される。自作の詩の記録中に1927年11月6日の日付が記され、日本に戻られてからしばらく覚書として使用されたことがわかる。2009年めぐみ会資料室で発見され、学院に移管。



24 ノート（覚書） 神戸女学院所蔵

1949年以降に記された読書等の記録。2009年めぐみ会資料室で発見され、学院に移管。

- 25 *Poems down the years* / by Charlotte B. DeForest ; edited by Angie Crew, Kishi Kunizo, Oshima Hatsue, Yamashita Shigeko. Kobe College Alumnae Association, 1960  
書籍と挿絵・表紙の印刷用銅版原版 神戸女学院めぐみ会所蔵

1960年、同窓会（現・めぐみ会）から出版された詩集。自筆書込みがあり、挿絵・表紙の印刷用銅版原版も残っている。先生は“Some Types of Japanese Poetry”という日本の詩歌の研究でミス・カレッジから1907年にM. A.の学位を、さらに1921年にはL. H. D.の学位（名誉博士号）を受けた。

- 26 *The prancing pony : nursery rhymes from Japan* / adapted into English verse for children by Charlotte B. DeForest ; with "kusa-e" illustrations by Keiko Hida. A Weathermark edition. John Weatherhill, 1967 神戸女学院所蔵

1967年John Weatherhill社から出版された日本のわらべ歌を紹介する詩集。1968年4月、シカゴ・トリビューン社主催の児童図書祭（Children's Book Festival）で優秀作品の一つに選ばれ、賞を受けた。

- 27 わらべ歌のカード（自筆） / illustrated and translated by Charlotte B. DeForest. 1908 神戸女学院所蔵

両親が結婚34年（1908年）を記念して太平洋を渡って日本に帰る際、航海中毎日1枚ずつ読むようにと配慮して両親に贈った手作りのわらべ歌のカード（全30枚）。日付が入っておりカレンダーになっている。



28 『蜘蛛の図』 / Charlotte B. DeForest. 神戸女学院所蔵

丹念に描かれた数種類の蜘蛛の絵（10 cm×12 cmのカード 54枚）。自然をこよなく愛した先生は草花だけではなく昆虫にも関心を持っていた。本学図書館の受入は1941年6月。



《美-教育-》

29 創立50周年祝賀会記念の扇子 神戸女学院所蔵

【院長として】

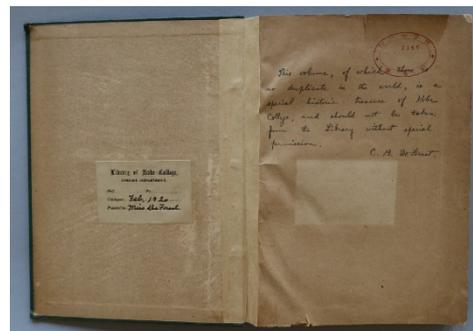
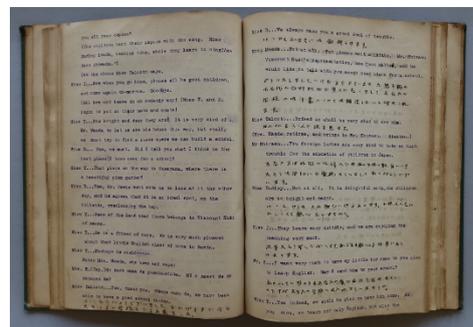
30 神戸女学院院長シ・ビ・デフォレスト先生之像 長尾己画 1934 油彩 神戸女学院所蔵  
現在はデフォレスト記念館会議室に飾られている。

31 院長就任式の写真 パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵

1916年3月29日院長就任式挙行。この日は学院創立40周年記念式、ソール名誉院長推戴式も行なわれた。式中、先生は学院理事 Cary 博士から鍵を手渡された。使徒ペテロがキリストから天国の鍵を預かったように。

32 *Eliza Talcott : Founder of Kobe College* / edited by Charlotte B. DeForest, Toki Fujita, Chitose Kuroha. Kobe College, 1919 神戸女学院所蔵

創立者タルカッタ召天後、その時点で集めることのできた史料（一次及び二次）を1919年に先生が編集した記録集。1920年に図書館に寄贈された時点では19点の史料が収められていたが、その後追加され24点になっている。のちの神戸女学院史編纂に繋がる歴史家としての先生を示す史料。当該頁は、本学創立期の様子を演劇に仕立てた脚本部分。扉部分の自筆文章の和訳は「この本は世界中でどこにも複本のない、神戸女学院の特別な歴史的宝物である。したがって特に許可されない限り、図書館からの帯出を禁じる」（渡辺久雄「デフォレスト先生と史料集」『学院史料』第4号（1986年3月発行）所収）



33 *The history of Kobe College : compiled on the occasion of the seventy-fifth anniversary of Kobe College, Nishinomiya, Japan, 1875-1950* / by Charlotte B. DeForest. Kobe College Corporation, 1950 神戸女学院所蔵

1950年シカゴのKCCから出版された英文神戸女学院75年史。帰米中に資料を集め、戦後、帰院した時に執筆したもの。歴史的資料に基づいた学院史の基礎的文献である。タイプ印刷製本の私家版。

34 『西洋禮法』 / シー・ビ・デフォレスト, シー・デー・ルーミス著 ; 日本基督教教育会, 基督教女子教育会編. 日本基督教興文協会, 1920 神戸女学院所蔵

1920年日本基督教興文協会から出版されたC.D.Loomis共著。C.D.LoomisはClara Danison Loomis (1877-1968)のことか。クララは長老派宣教師Henry Loomisの娘で横浜共立女学校校長。1931年にヘラルド社から『西洋の社交と礼儀』という本を出版している。ヘンリーの妻はD.C.Greeneの妹。

35 *The woman and the leaven in Japan* / by Charlotte B. DeForest. Central Committee on the United Study of Foreign Missions, 1923 (原作) 神戸女学院所蔵

『パン種としての日本女性 日本の近代化に活躍した女性たち』 / C.B.デフォレスト著 ; 別府恵子, 頼広節子訳. 春秋社, 1984 (翻訳) 神戸女学院所蔵

近代日本の各領域におけるキリスト教と女性の働きについて論述した書物。竹中著書は「よくまとまった啓蒙書」と評し次のように述べる(p.110-117参照)。

具体的な女性たちの体験を基として実証的に記述したことは、当時においては他に類のない啓蒙的意味を持っていたと評価される。〔略〕現実的な立場からキリスト教の女子大学の困難さについて触れている。大学においてキリスト教教育をどう進めるかという課題が提起され、〔略〕YWCAや婦人矯風会の働きやその他の奉仕活動の重要性があげられている。〔略〕本の結びにこういっている。「キリスト教というパン種をもった女性が、日本女性のあらゆる面に進出しています。イエス・キリストが生きて死に、再び甦って地上に神の国をつくられたという事実が、女性の生活を一肉体的にも社会的にも、経済的にも知的にも、精神的にも一変えすにはおこななかったのです」(『パン種としての日本女性』p.230)

#### 【音楽教育】

36 エステー社製リードオルガンの写真 パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵

1872年製造No.303933。61鍵、Fスケール、スウェル装置2、ストップ数11。先生が藤田トキに譲ったオルガンで2008年修復されて、めぐみ会館会議室で讃美歌の伴奏に用いられている。(『めぐみ』第77号(1988年7月発行)参照)

37 メーソン&ハムリン社製リードオルガンの写真 パネル 神戸女学院めぐみ会所蔵

蓋の内側にStyle 447 No.197446と書かれている。61鍵、Fスケール、スウェル装置2、ストップ数13。1905年先生が神戸女学院着任時に持参したオルガン。(『めぐみ』第77号(1988年7月発行)参照)

38 *Selections from the music dramas of Richard Wagner* (The musicians library XV) / Richard Wagner ; arranged for the piano by Otto Singer ; with a preface by Richard Aldrich. Oliver Ditson Company, 1905 神戸女学院所蔵

先生が30歳の誕生日に弟から贈られた楽譜。ペン書きの歌詞書き込みがある。音楽を担当した際、教材として用いていたかと思われる。(津上智実「シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』(ピアノ独奏用編曲版)」『学院史料』第24号(2010年10月発行)参照)

39 サイン入り楽譜 数点 神戸女学院所蔵

『日曜学校用聖歌集』、*Nocturnes* / von Fr. Chopin 他

先生の音楽活動については、津上智実「婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動：オペラ歌手柴田（三浦）環との共演」（『神戸女学院大学論集』57-1（2010年6月発行））、同「シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』（ピアノ独奏用編曲版）」（『学院史料』第24号（2010年10月発行））、同「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907～1923）の資料的価値とその内実」（『神戸女学院大学論集』57-2（2010年12月発行））参照。

竹中著書は先生が音楽科の主任として1年間ピアノと音楽理論を教えたことを述べるが、その後学内で発見された「音楽部レッスン帳（1907-1923）」の記載から、1909～15年の間、先生が、ピアノ、音楽理論に加えて、オルガン、（鍵盤）和声、歌唱、音楽史の指導を行なっていたことが明らかになった。

また『神戸新聞』『神戸又新日報』の記事により、1907～10年にかけて、神戸教会または新港倶楽部で開催された教会及び教育関係の慈善演奏会に、ギターやピアノの奏者として4回出演していることも確認された。これらはいずれも学内演奏会、慈善演奏会であることから、先生は、社会奉仕の一つとして音楽活動を行なっていたと考えられる。

先生は、1910年11月、神戸湊川新開地の相生座で開催された岡山孤児院支援のための慈善演奏会にも出演している。この時は、後に「世界の蝶々さん」として知られるようになるオペラ歌手柴田（三浦）環が歌ったロッシーニ作曲のアリア〈ウナ・ヴォーチェ・ポコ・ファ〉の伴奏を行なった。同演奏会出演の背景には、1905年以降、神戸女学院が岡山孤児院の支援を継続していたことと、もともと父デフォレスト博士が同孤児院の熱心な支援者であったという個人的繋がりがあった。

40 *Handbook of memorials and commemorative gifts in the new Kobe College plant at Nishinomiya, Japan : compiled for the dedication, 1934* / edited by Charlotte B. DeForest. Kobe College, 1934（原作）神戸女学院所蔵

『神戸女学院新築記念帖』 / シ・ビ・デフォレスト編. 神戸女学院, 1934（翻訳）神戸女学院所蔵

岡田山キャンパス移転を記念して募金に協力してくれた人々に謝意を表すため作られた記念誌。移転50周年に増補した形で復刻版『岡田山の50年』（神戸女学院、1984年）が刊行された。

【ご退職後】

41 『神戸女学院 その歴史を描く 明治八年-昭和二十五年 = Kobe College : historical sketches : 1875-1950』 / 神戸女学院七十五周年記念行事委員編. 神戸女学院七十五周年記念行事委員, 1950 神戸女学院所蔵

神戸女学院七十五周年記念行事委員会、1950年。学院創立75周年を記念して出版された記念誌。*The History of Kobe College*をベースに写真、学生活動等も記す。

42 「名譽院長をお迎えして」「名譽院長を迎えて」『めぐみ』第44号 / 神戸女学院同窓会, 1960年12月発行 p. 2-3 神戸女学院所蔵

創立85周年に同窓会が先生を招待した。1960年10月5日～11月2日まで日本に滞在し、その間記念式典に出席、仙台のご両親のお墓も訪れた。

43 **神戸女学院創立 85周年アルバム** 神戸女学院めぐみ会所蔵

創立 85周年記念行事を記念して同窓生により作成されたアルバム。記念式典の他、校舎、学校行事等、計 85点の写真が収められる。(【映像コーナー】参照)

**【当時の教育資料】**

44 『生物学概論 女子高等教育 1934-1935』 / 岩田正俊編. 神戸女学院専門部, 1935 神戸女学院所蔵

45 『衣類染洗整理法講習録』 / 矢田彦三郎著. 神戸女学院, 1933 神戸女学院所蔵

46 『神戸女学院専門部学生必携』 / 神戸女学院編. 神戸女学院, 1934 神戸女学院所蔵

47 『神戸女学院専門部一覽』 / 神戸女学院編. 神戸女学院, 1933 神戸女学院所蔵

48 *Kobe College (founded 1875) : handbook of information.* Kobe College, 1937 神戸女学院所蔵

**【デフォレスト院長時代の周年行事】**

49 *Song-album* / compiled by student self government. Kobe College, 1935 神戸女学院所蔵

学生自治会が神戸女学院 60周年記念として編集したもの。

50 *After sixty years.* Kobe College Corporation, 1935 神戸女学院所蔵

創立 60周年について記す資料。1935年 10月 17日創立 60周年記念式が行なわれ、記念文芸会（高等女学部生が「紙風船」(舞踊)、専門部生が日本劇「震災餘譚」等を披露)、研究発表記念展覧会が開催された。また創立 60周年記念式の歌が作られ、記念出版物が 3冊発行された。(『めぐみ』第 27号 (1935年 12月発行) 参照)

51 *The Clover : special edition in commemoration of the sixtieth anniversary, October 1935.* English Speaking Society of Kobe College, 1935 神戸女学院所蔵

60周年の記念誌。本学の歴史の初めの 50年間についての記述は先生による。

52 *The Barretts of Wimpole Street : a comedy in five acts* / Rudolf Besier. Victor Gollancz, 1936 (原作) 神戸女学院所蔵

『ウキンポール街のバレット家 五幕喜劇』 / ルドルフ・ベジーア作 ; 神戸女学院英語師範科三年一同訳. 神戸女学院高等部英語師範科, 1935 (翻訳) 神戸女学院所蔵

60周年行事では、学生による演劇や演奏会が開催された。60周年の催事では当時専門部の教授であった丹部トモ先生(英語・英文学担当)の指導によるロバート・ブラウニング夫妻の出会いを描いた『ウキンポール街のバレット家』(原題 *The Barretts of Wimpole Street* 1930年ロンドン初演、1931年ニューヨーク初演)の翻訳劇が上演された。

53 Kobe College Year Mottoes 神戸女学院所蔵

Kobe College Year Motto の制定は1889年第3代ブラウン院長の時に始まる。このモットーは、創立60周年展示会のために各年の標語をクロスステッチで46枚製作したものの一部。当時の展示の様子は写真に残る。



54 『デフォレスト先生記念特輯号』（YWCA季刊） / 神戸女学院大学女子青年会編. 神戸女学院大学女子青年会, 1951 神戸女学院所蔵

和英両用。日本語部分は寄稿者による先生の思い出と1939年に文部省へ提出した先生の功績調書からの抜粋（喜志邦三氏作成）、英語部分は先生による“A GREETING”、「女学院精神を表はす劇」（75周年の際に上演されたもの）や「先生のこれまでの御生涯や御帰米後の御仕事」を取り上げる新聞記事等。

【デフォレスト先生に関する学内研究成果物】

55 『C.B.デフォレスト書簡の解説』I~VIII / 津上智実編. 神戸女学院大学「宣教師文書」研究会, 2016-2022 神戸女学院所蔵

2015年度から7年間続けられた先生の書簡に関する学内共同研究（代表者：津上智実、研究分担者：飯謙、田辺希久子、白井由美子、中野敬一（参加順））の研究報告書。本研究は、先生がアメリカン・ボードの伝道会本部に書き送った書簡（ハーヴァード大学の貴重書図書館ホートン・ライブラリーに保管）の解説とデジタル化をめざした長期プロジェクトで、8冊の報告書には、書簡に記される神戸女学院の音楽、英語、宗教教育等の教育活動に関する論考や学校運営の状況等を取り上げた考察がまとめられている。本学赴任の年である1905年から宣教師を引退した1950年に至る45年間の書簡を網羅した本研究により、国際的な宣教師団を背景に活躍した先生の姿が浮かび上がる。

56 デフォレスト記念館 写真と絵葉書 神戸女学院所蔵

61 参照。

【映像コーナー】

57 神戸女学院記念歌 Beauty Becomes a College (美は学舎にふさわしく)(2000年制定) C.B. DeForest 作詞(1933年)；澤内崇作曲(2000年)；八木澤教司編；齊藤言子独唱(ソプラノ)；神戸女学院大学音楽学部ウインドオーケストラ演奏(3分04秒)

A面「或ル日ノ感想」(3分10秒)、B面「Bible Reading」(2分31秒) タイヘイレコード  
1935年6月。先生の肉声が吹き込まれたレコード。創立150周年のStatementは講話「或ル日ノ感想」による。

神戸女学院創立85周年関連行事音声テープより(4分28秒)

画像はその時のアルバム写真。

神戸女学院 150周年記念映像 Story01 神戸女学院創立150周年 特設ページより(4分09秒)

神戸女学院 150周年記念映像 Story02 神戸女学院創立150周年 特設ページより(3分22秒)

[1階ホール]

58 山本通キャンパス模型(神戸女学院旧敷地建物模型) 中澤教育品製作所制作 神戸女学院

## 所蔵

高等女学部第49回卒業生寄付。1933年3月当時の山本通キャンパスの状況を示す。正門の門柱は移設し、岡田山キャンパスの谷門の門柱となっている。

### 59 岡田山キャンパス模型 景観模型工房制作 2008年 神戸女学院所蔵

1933年移転当時の岡田山キャンパス。1995年の阪神淡路大震災で被災し取り壊された現存しない建物を見ることが出来る。

### 60 奉安庫と奉安殿の一部 1937年制作 神戸女学院所蔵

御真影を収納した奉安庫（講堂に置かれていた）の台の部分とソールチャペル脇にあった奉安殿の屋根の一部。

### 61 デフォレスト記念館模型 神戸女学院所蔵

先生の名前を冠した100周年記念館の一つ。1976年3月26日献堂式。東西の壁面に先生を象徴するステンドグラスがあり、東は天に召される際枕元で読まれた聖書の箇所（詩編23編）、西は先生の人生を象徴する「教える者」のデザインであったが、西側は現存していない。写真と絵葉書は2階に展示。

### 62 1933年移転当時の岡田山周辺の航空写真 神戸女学院所蔵

## 説明文パネル

### Dr. John Hyde DeForest & Mrs. Sarah Elizabeth Starr DeForest

父ジョンは牧師の家庭に生まれ、苦学してイエール大学に入学、牧師になる決心を固めた。結婚後すぐに妻と子供を同時に失うという悲劇に見舞われ、失意から回復したのち、海外伝道を志した。ジョンはサラと出会い、1874年9月23日結婚、10月31日に日本派遣宣教師として太平洋を渡り、大阪で伝道活動を始めた。大阪には地方伝道に尽力したO.H. ギューリックと日本文化に深い関心を寄せ同志社で教鞭をとったM.L. ゴードンがおり、彼らとの交流を通して伝統的な諸宗教や日本文化を理解していった。生涯にわたって日本の文化と宗教について深い関心を持ち続けたジョンが重視したのは日本語を学び、それを通して日本の文化を理解することであった。1886年から1911年67歳で永眠するまで仙台に居を置いて東北地方の伝道に尽力した。1908年勲四等旭日瑞宝章を受章。日米間の友好に貢献したことが理由であった。

母サラは農家の出身で、数年にわたって教師として働いた経験があった。仙台では本国から種を取り寄せて庭で野菜を育て、教科書を取り寄せて4人の子供を家庭で教育した。しつけは厳しく、自分のことは自分で取り行なう責任感を養うとともに、やがてアメリカに赴いても勉学に困らないようにと基礎的な学習に力を入れていた。日本文化を知るためにカタカナの学習や浴衣を縫うこと

も教えたという。夫ジョンの死後 1913 年に神戸に移り、娘と共にアメリカに渡り、夫の伝記出版を見届けた。1914 年、仙台でのデフォレスト記念会堂（現・仙台北教会）の献堂式に出席し、1915 年この世を去った。デフォレスト家では毎朝家族が揃って家族礼拝をし、聖書を読み、祈り、讃美歌を歌っていた。これはピューリタンの習慣である。また時には家族で楽器の演奏を楽しんだという。シャーロットはピアノを弾いていた。（竹中著書 p. 7-31 参照）

## アメリカンボード（ABCFM）

神戸女学院はアメリカのボストンに本部のあったプロテスタントの海外伝道団体 American Board of Commissioners for Foreign Missions（ABCFM、通称・アメリカンボード）から派遣された 2 人の女性宣教師イライザ・タルカット（E. Talcott）とジュリア・ダッドレー（J. Dudley）によって、1875 年、神戸で創立された。

アメリカンボードには女性伝道会という女性の伝道活動を支える協力団体が 3 つ（Woman's Board of Missions - WBM・東部女性伝道会、Woman's Board of Missions of the Interior - WBMI・中部女性伝道会、Woman's Board of Missions of the Pacific - WBMP・太平洋岸女性伝道会）あり、神戸女学院は創立以来、校長・院長を含む多くの派遣宣教師の出身地である中部の WBMI の支援を受けていた。

## 神戸女学院のリベラルアーツ教育

Liberal arts education とは、元々ギリシャに端を発する古典的学芸、自由七科とも呼ばれた古典的教養を指す言葉であった。リベラルアーツ教育が目指すのは広い視野、柔軟な思考力、健全な判断力を持った自由人の形成で、all-round training（全人教育）、harmonious development（調和的発達）が教育目標とされた。このリベラルアーツ教育が中世から近世にかけてヨーロッパ、特にイギリスで大学教育に取り入れられ、イギリスからアメリカへと伝わった。そしてアメリカにおいて小規模な私立大学、いわゆるリベラルアーツ・カレッジの理念や内容を構成するものとなった。ギリシャの古典的リベラルアーツと少し違うのはそこにキリスト教という宗教的要素が加わり、ピューリタン（清教徒と訳される、メイフラワー号でアメリカに渡った人々）的信仰や敬虔な宗教的雰囲気と結びついたことにある。

神戸女学院の創立者たちが来日したころ、アメリカでは女子高等教育が隆盛を迎えていた。College と呼ばれた女子高等教育機関では男子大学と同等の知的水準の教養とキリスト教に根差した深い宗教性を身につける教育を行っていた。創立者の 2 人もその教育を受け、この理念のもとに日本で神戸女学院の元となる女学校を創立した。宣教師たちは一人一人と向き合う個の関係性と他者に奉仕する精神を大切にする教育を行ってきた。

校章の三つ葉のクローバーに象徴される身体、精神、靈魂の調和的発達を目的に共感性の高い女性を育む教育を現在も続けている。（岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院」『神戸女学院百年史 各論』所収参照）

## 神戸女学院の家政学の伝統

1930年代に入り、世の中は戦時色が濃くなり、時世の要求に合わせて学科を改変する必要に迫られた。神戸女学院の家政学の歴史は古い。高等教育を始めた1880年代後半から学科名にこそならなかったが、家政学的科目は連綿と続いてきた。学校で長期間学ぶことが難しい時代の訪れと共に、高等部という3年制（現在の短期大学的感覚）のカリキュラムが登場し、人気を博した。教員資格を得ることが出来たからである。そしてこの高等部の別科としてさらに修業年限の短い2年制の家政科が誕生した。英語が全くない神戸女学院異色の学科であった。しかしカリキュラムの中には栄養学、心理学、自然科学、衛生学、社会事業研究、現代史という科目が見られ、学科としての構想がいわゆる「良妻賢母」教育ではなかったことがわかる。現在の人間科学部に繋がるカリキュラムと言える。

## KCC

アメリカンボードの協力団体WBMI（Woman's Board of Missions of the Interior、中部女性伝道会）は、1920年、キャンパス移転を計画した先生が支援要請をした際、WBMIとして神戸女学院のみに多額の支援をすることが困難であったため、Emily White Smith元会長と共に多くのWBMI会員が学院支援に特化した団体を新たに組織した。それがKobe College Corporation（KCC）である。KCCはキャンパス移転の校舎建築費として70万ドル（現在の価値で約100億円）という資金を募金によって集めた。以後、KCCは理事会の理事を推薦するなど、アメリカンボードに変わって実質的に神戸女学院の経営を担っていた。2003年、KCCはKobe College Corporation - Japan Education Exchange（KCC-JEE）と改称しているが、現在もアメリカで、神戸女学院の教育のための支援を続けている。

## 神戸女学院の教育（デフォレスト先生）

キリスト教批判の強まる社会的状況の中にあっても、神戸女学院ではキリスト教教育を続け、クリスチャンとなる学生がいた。それはキリスト教信徒になる決心をさせるような教育が行なわれていたからに他ならない。それを可能にしたのは先生のようなアメリカ人教師たちの存在であった。学生たちに与えた宣教師たちの「信仰を生きる人」としての人的、人格的な影響は大きかった。

先生は人生の大半を教師として献身し、そのうち25年は神戸女学院の院長として学院の精神、教育のかじ取りをしてきた。ある同窓生は言う。「デフォレスト先生の信仰、その人と思想が、神戸女学院の教育を本当に生命あり、力あるものにするための『鍵』だったのではないかと。（武田清子「思想史的に見た昭和期の学院――学生としての体験から――」『神戸女学院百年史 各論』所収 p. 380、p. 385 参照）

## 神戸女学院の教育（自由と自治）

ある同窓生は1934年、県立高等女学校から神戸女学院に進学した。入学当初は規則の厳しい高等女学校と比べて、学生の行動や学校のあり方全体が締まりのない、だらだらしたもののように思えてなじめなかった。しかししばらくしてよく見ていると、学校では「外からの規律」ではなく目に見えない「内からの規律」が重要な意味を持つことがわかったという。神戸女学院は当時の日本の学校としては稀な自由の精神の漂う学校であった。1907年に学生自治会が結成され、学校生活の全てが学生の自治に任されていた。先生は深い信頼をもって学生に接し、学校の重要な責任を何の不安げもなく学生に託された。そうすると学生は勝手なことは出来ず、自分たちが先生の深い信頼に答え得る者なのかと自問自答しながら一生懸命に責任を果たそうと努める者へと変えられていったように思うと。

そこには先生の大切にされた「自由」が根底にある。それは一人一人が自主性を持って自らが果

たすべき責任を十分に果たす人間になるという意味での「自由」であった。この個人の自主性、自由、責任を守り続けてきたのは、単なる西洋の個人主義によるのではなく、神と個人の一对一の関係を基盤とするキリスト教信仰に基づく先生の間観による。

先生の間観とは、神が一人一人に使命を与えている。他の誰もなし得ないものを社会に貢献することのできるチャンスを一一人一人に与えている。一人一人に違った使命を与えている。神が与えた時代、場所、使命を自らが発見し、その使命を果たそうと努力することが大切である、という考え方である。(武田清子「思想史的に見た昭和期の学院――学生としての体験から―」『神戸女学院百年史 各論』所収 p. 375, 389, 390 参照)

### 神戸女学院の教育（国際精神）

戦争の時代であっても神戸女学院では教育理念の一つである国際理解の精神は守られ続けた。アメリカのキリスト教界の著名な指導者を招いて度々講演会が開催された。1934年から1940年にかけて日本とアメリカで交互に日米学生会議が開催され、学生の参加を学校は積極的に後押しした。1939年4月に東京で開催された日比（日本とフィリピン）学生会議には神戸女学院の学生が多数参加した。また、学校には常に中国や韓国からの留学生が在籍していた。

ある同窓生はこうした学校の国際主義について次のように言っている。

学生たちに世界の友と交わる機会を持たせ、人類社会の一員として生きる者としての善意の建設的な理想主義と、そのために一人ひとりが働くべきだという使命感とを育むことに、神戸女学院の教育は特に力を注いでいた、と。(武田清子「思想史的に見た昭和期の学院――学生としての体験から―」『神戸女学院百年史 各論』所収 p. 381-382 参照)

### Friends of Kobe

1930年KCC内に日米親善のための組織“Friends of Kobe”が作られた。奨学金の給付を受けた日本やアジアに関心を持つアメリカの若い研究者や教育者が、一年間日本に滞在し、神戸女学院のスタッフの監督・指導の下に日本研究やアジア研究に当たる留学制度である。この奨学金を得て1937年から1941年まで計7名のアメリカ人留学生が神戸女学院にやって来た。

この留学制度は一方通行ではなく、神戸女学院からも5名の交換留学生がアメリカに送られた。その際の奨学金はアメリカからの留学生の母校である大学（オリヴェット・カレッジ、ラドクリフ・カレッジ、ロックフォード・カレッジ、レイクイリー・カレッジ、マウントホリヨーク・カレッジ）が用意した。

第二次世界大戦以降、ラドクリフ・カレッジとレイクイリー・カレッジとの姉妹校関係はなくなってしまったが、ロックフォード・カレッジとの関係は派遣留学という形となって現在も継続している。(岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院」『神戸女学院百年史 各論』(1981年) 所収 p. 308-312 参照)

## 御真影奉戴

1936年、文部省から御真影奉戴について内示があった。これまでキリスト教主義学校の多くは各種学校なので奉戴する資格がないとしていたが、1937年には全学校の奉戴が法的に規定される気配が見えた。神戸女学院でも自発的に奉戴する方が無難であるという意見に従って、御真影奉戴を決定し、奉安殿の設計をヴォーリズに依頼した。同年、ヴォーリズは校舎との調和を考慮して神社建築様式とは異なる奉安殿を中庭の西北端ソールチャペルの入口前左に造営した。御真影奉戴関連費用のため同窓会は募金を集めた。1937年10月7日、8日、文部省の視学官が視察に訪れ、屋根の高さが周囲より低いことを問題にしたが、県庁の認可がある旨告げたので、それ以上追及されなかった。

こうして1937年12月18日、御真影が県庁より授与され、奉戴式を行なった。御真影奉護規定が設けられ、男子の教職員が交代で宿直を担当した。宿直に当たる教職員に対してきめ細かな配慮を求めて、日本人以上に至誠を尽くした。最初に宿直にあたったのは先生であった。御真影は一度だけひそかに移されたことがあった。学院に悪意のある人が何かをするかもしれないという不安があったので、6週間総務館の金庫に隠されていたという。（『神戸女学院百年史 総説』p. 222-224、竹中著書 p. 134-136 参照）

## 戦時下の苦悩（1）

1937年、日本は中国との全面戦争に突入した。政府は国民に対する統制を強化するため「国民精神総動員の日」を設定、神戸女学院でも広田神社に毎月参拝するようになった。

日本キリスト教連盟はキリスト教信徒迫害を心配して、誤解を招かないよう努力してほしいと全国の教会や学校に要請を出した。そのため学院は南京陥落の際には祝賀旗行列を行なった。アメリカ人教師は参加を拒んだが、先生はアメリカ人としてよりも院長として参加することが学院存続のために必要であると判断したからである。生徒の行列の先頭に立ち、西宮公会堂前で万歳三唱した。ところが1938年、先生は日本側の検閲を免れた情報によって南京で虐殺行為があったことを知り、「日本の武士道は地に落ちた」と嘆き、それ以降一切の行列に参加しなかった。それを伝え聞いた新聞記者がやってきて、この戦争をどう思うかという趣旨の質問をした。状況を案じて駆け付けた日本人教師が中に入って会話を別の方向に持って行って事なきを得た。のちに先生は「わたしはかなり緊張しており、目に涙して答えたに違いない」と言っている。（『神戸女学院百年史 総説』p. 221-222、竹中著書 p. 144-145 参照）

## 戦時下の苦悩（2）

1938年、日本組合基督教会会長が大阪の公開講演会の席上で明治天皇御製を読み違えるという事件が起こり、会長を辞任、当時神戸女学院副院長であった畠中博牧師が後任の会長に就任した。大阪憲兵隊から管内のキリスト教関係者にキリスト教の神と天皇、神道・仏教等との関係についての13か条の質問状が出され、副院長宛にも届いた。畠中副院長の回答が学院の意思表示となると考え、デフォレスト院長は学院で回答内容を諮った。文章の書き方について先生は心配したという。協議の末、次のような見解が出された。「基督教も日本精神も共に滅私奉公、正義人道を中心思想とし、又共に明浄正直の誠を以て旨とし、之れに加ふるに他に対する寛大なる精神、包容的精神を以てすること両者の一致するところである」

憲兵隊からは政府に協力するようとの回答が送られてきた。（『神戸女学院百年史 総説』p. 227-231、竹中著書 p. 142-143 参照）

第5代院長 召天 50周年「C.B. デフォレスト展 ―愛と美を求めて―」 2023.5.23-7.13  
主催：学校法人神戸女学院、特別協力：公益社団法人神戸女学院めぐみ会、竹中百合子

神戸女学院創立150周年記念展示第一弾

『C.B. デフォレスト展―愛と美を求めて―』展示目録

2023年5月23日発行

学校法人神戸女学院

西宮市岡田山4-1

(制作：神戸女学院大学図書館・史料室)